

2013年11月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 難事に立ち向かう

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「嘱累品」

### 1. 嘱累品の概要

- (1) 釈迦牟尼世尊が立ち上がり、菩薩たち一人一人の頭をなでて、妙法蓮華の教えを流布するようにと語りかけます。
- (2) 菩薩たちが揃って、世尊のおっしゃる通りにいたしますと誓いを述べます。
- (3) 法華経の説法が一段落します。

### 2. 総付嘱

#### (1) 嘱累

嘱累（ぞくるい）というのは、〈面倒を頼む、委嘱する〉ということです。前の《如来神力品第二十一》の最後に説明した付嘱ということと同じです。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.198）

#### (2) 総付嘱

この品は、お釈迦さまが、すべての菩薩の頭をおなでになって、「この尊い悟りを後世に伝えるという一大事を、みんなに託したいのです。どうか、一心にこの法を説きひろめて、ひろくあらゆる衆生の利益（りやく）を増進させてください」とお頼みになる章です。このことを古来〈総付嘱（そうふぞく）〉とよんでいます。（同p.198）

#### (3) 頭をなでる

頭を撫でるのは、日本では褒めてやる意味をもっていますが、インドでは「おまえに任せるぞ。しっかりやれよ」という信任の意味をもっているのです。（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p.578）

#### (4) 値遇への感激と難事にいどむ喜び

菩薩たちはこのおことばをうけたまわって、この上ない感激をおぼえ、この難事にたちむかうことに喜びを感じ、固い決意を表明します。

この〈値遇にたいする感激〉と〈難事にたちむかう喜び〉を、われわれ現代の菩薩もじっくりと心にかみしめなければなりません。それがこの品の最大の要点です。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.198～199）

### 3. 値遇

人の持つ力を正しく見極め、その力を認め、その力があればこの程度のことはできるだろうと、少し難しい仕事を与えて、成長を促すこと。

ここでは、菩薩たちが釈迦牟尼世尊から値遇を受けて、深く感動したことが語られています。

### 4. 難事

#### (1) 難事

この世間で、妙法蓮華の教えを受持することは、きわめて困難であると、法華経の経文に繰り返し説かれています。これを“難事”と言います。

#### (2) 何故“難事”なのか

“難事”の理由は、難信難解(なんしんなんげ)だからだと言われています。

難解とは、妙法蓮華の教えを理解することが極めて難しいということです。

理解できないから、妙法蓮華の教えを信じるのがきわめて難しくなります。これが難信です。

#### (3) 何が難信難解なのか

庭野日敬師は、難信難解の理由を次のように述べています。

「われわれ現代人から見れば、法華経が難信難解であるのは……

一、〈諸法実相〉ということの深遠さ。

二、お釈迦さまのいのちが永遠であるという真実のつかみにくさ。

三、一切衆生がみんな仏になりうるという大宣言と、現実の人間のすがたとの比較からくる隔絶の感じ。

このような点に要約されるのではないかと思います」(庭野日敬著『新釈法華三部経 5』p. 223～224)

これに続いて、師は、次のように述べています。

「しかし、まえにもたびたびのべましたように古代や中世の人びととちがって、現代人にとってははるかに理解しやすい教えであると、わたしは信じています。」(同)

#### (4) 難事に立ち向かう

妙法蓮華経の法師品から嘱累品までを学びますと、妙法蓮華の教えを自ら実践することも、人びとに伝えることも、きわめて難しい。けれども、あらゆる人々のためにやるべきことである。あなたがたはそれに気づいたのだから、心を定めて立ち向かいなさいと、勧めてください、励ましてくださっていると受け取ることができます。

## 5. 再び靈鷲山へ

### (1) 一段落

仏さまの寿命が無量であることと、そのことを確信することの功德を説く一番重要な部分がこの  
ここで完結し、妙法蓮華經の説法に一段落がつけました。

法華經のドラマの《理想（虚空）の場》が幕を閉じ、舞台はふたたび靈鷲山に降りて、《現実  
（靈鷲山）の場》となります。

### (2) 二処三会（庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』p. 118～119）

- ① 法華經の説法会は、山上と虚空の二か所で、三回にわたって行われますので、〈二処三会  
（にしよさんえ）〉といわれています。
- ② 山上は現実、虚空は理想です。どのような教えにしても、はじめは現実に即した教えでない  
と、とっつきにくくもあるし、理解もむずかしいのです。ですから仏さまも、はじめは、どう  
したら迷いを去り、人生苦からのがれられるかという、現実的な問題からお説きになったので  
す。
- ③ 法華經だけを見ても、最初のほうでは、この世の成り立ちはどうなっているのか、人間とは  
どんなものであるか、人間と人間との関係はどうあるのが正しいかということを見きわめる智  
慧をお説きになりました。
- ④ そういう智慧が身についてきたら、いよいよ理想の境地を示さなければなりません。すなわ  
ち、久遠本仏と一体となる境地であります。これは、凡夫にとって現実の生活ではなかなかつ  
かみにくい境地であります。僧伽（そうぎゃ）の仲間（正しい宗教団体）に入り、さまさまの信仰上  
の修業なしではなかなか悟ることができません。つまり、虚空にのぼってこそ到達しうる境地  
です。
- ⑤ その悟りにたったら、こんどはまた現実にたちもどって、その悟りをこの世で実践にうつ  
し、またおおくの人びとにおよぼしていかなければ、人類全体の救いは実現せず、したがって  
自分個人の救いも完成しません。そこで、説法会もふたたび現実にもどるわけです。

## 6. 三つの智慧

### (1) 三つの智慧

経文に「仏の智慧・如来の智慧・自然（じねん）の智慧」とあります。これを庭野日敬師が「真実の智慧・慈悲の智慧・信仰の智慧」と解釈し、解説しています。

### (2) 仏の智慧＝真実の智慧

仏というのは仏陀（ぶつだ）の略であり、仏陀というのは「覚者」ということです。真如すなわち宇宙の真理を悟った人という意味です。したがって「仏の智慧」というのは、宇宙の真理を悟った智慧、諸法実相を見通す智慧のことです。つづめていけば「真実の智慧」であります。

（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 581）

### (3) 如来の智慧＝慈悲の智慧

「如来」というのは、「真如から来られた人」という意味です。真如を悟ったばかりでなく、真如から「来られた」というところに深い意味があるのであって、どこへ来られたのかといえば衆生の世界へ来られたのです。なぜ衆生の世界へ来られたのかといえば、衆生に真如を悟らせて救ってやろうという大慈悲からであることはもちろんです。したがって、「如来の智慧」というのは、「慈悲の智慧」ということです。（同p. 581）

### (4) 自然の智慧＝信仰の智慧

つぎの自然の智慧というのがいちばんむずかしいことばであって、自然というのは「自ら生まれた」という意味で、これは心の中に生じてきた信仰をいうのです。ですから、「自然の智慧」というのは、「信仰の智慧」にほかなりません。（同p. 581~582）

### (5) 人格完成

そこで、人間がほんとうに人格を完成するには、「真実の智慧」と「慈悲の智慧」と「信仰の智慧」を円満に具えなければならない。そして、如来はこの三つの智慧をわれわれに授けてくださるのです。（同p. 582）

### (6) 如来は大施主

三つの智慧を説いた直後の経文に「如来は是れ一切衆生の大施主なり」とあります。これらの三つの智慧を、惜しげもなく与えてくださるのですから、まさしく大施主であり、これ以上の施主はないわけです。

私たちも教えを学び、智慧を得たら、惜しむことなく人々にお伝えして、三つの智慧の施主になることが大切だと思います。